

ポニー・テールは、ふり向か

Ponytail Never Says "Good-Bye"

喜多嶋 隆

Kitajima Ryū



ポニー・テールは、ふり向かない

Ponytail Never Says "Good-Bye"

喜多嶋 隆

Kitajima Ryū

ポニー・テールは、ふり向かない 喜多嶋 隆

発行者／角川春樹 印刷所／大日本印刷 製本所／鈴木製本
発行所／角川書店

東京都千代田区富士見 2-13

〒102 振替東京3-195208

TEL 営業03-238-8521

編集03-238-8451



昭和59年9月10日 初版発行

Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-04-872389-8 C0093

も・く・じ

第1話	ロンリー・ハート海岸	2
第2話	ダウン・タウン・メモリー	40
第3話	さよならベイ・ブルース	78
第4話	悲しいほどバラード	120
第5話	ロング・ロング・グッドバイ	162
第6話	イエスタデイズは通り雨	208



第／話

ロンリー・ハート海岸



ふいに、オシッコがしたくなった。

あたしは、パイナップル畑に入っていく。

道路から50ヤードぐらい。

見回す。動くものは、何もない。西側は、DELMONTE社のパイナップル畑。ちょっとくすんだグリーンが、地平線までつづいている。

あたしは、カット・オフ・ジーンズをおろす。畑の中にしゃがんだ。
SHOOT！

乾いた赤土に、気持ちよく吸いこまれていく。今シーズンのDELMONTEは、きっとDOLLより豊作だろう。

終わる。

紙がないのに気がついた。

アロハ・シャツの胸ポケットをさがす。四つに折った紙が出てきた。

さっき、手続きが終わって出てくるとき、^{ガールズ・ホーム}感化院の教官がくれた紙だ。

〈何かあったら、すぐ電話するように〉

その下に、^{ガールズ・ホーム}感化院と自宅の電話番号。

うまいぐあいに、紙質が悪くてやわらかい。

くしゃくしゃともむ。^ふ拭く。立ち上がる。

乾いた風が、パイナップル畑を吹いた。紙が、舞い上がった。背の低いパイナップル畑。その上を、紙飛行機みたいに、どこまでも

地平線に向かって飛んでいく。

カット・オフ・ジーンズのチャックを上げた。

あたしは、小さなデイ・バックを左肩にかけた。

口笛で〈Me And Bobby Mcgee〉を吹きながら、道路に戻る。



午後1時。^{ひび}陽射しがまぶしい。

ちぎれ雲の影が、パイナップル畑の上をゆっくりと動いていく。

道路に面して、DELMONTEの看板が突っ立ってる。

看板には、穴があいていた。小さな穴が、いくつも。通りがかりのクルマから、ショット・ガンで撃ったあとだ。

看板によりかかる。北の地平線まで、一直線につづく道路をながめる。

1台、きた。

半マイルぐらい先に、クルマのバンパーが光る。

近づいてくる。白いTOYOTAだ。あたしは右手を出す。親指を立てる。

TOYOTAは、スピードをゆるめなかった。時速70マイルぐらいで、突っ走ってくる。

クルマの窓から、なんか飛んできた。思わず背中を丸める。右手で頭をガードする。

ガーンッと音がした。

クルマは、あっという間に走り去る。クルマが巻き上げた赤土で、ひどくムセた。

あたしのすぐわき、DELMONTEの看板に命中したのは、OLYMPIAの空き缶だった。

悪態を吐く。足もとにころがった空き缶を、蹴^けり飛ばした。もう、TOYOTAは見えなくなっていた。



15分後。2台目が、きた。

今度は、つかまえてやる。カット・オフ・ジーンズを、ぐいっと引っぱり上げる。自慢のヒップが、半分ぐらいはみ出る。

小型トラックだった。また、右手を出す。

青いCHEVROLETの小型トラック。かなりボロだ。

20ヤードぐらい過ぎて、トラックはとまった。あたしは、デイ・バックを肩に走っていく。

窓から顔を出したのは、白人のおっさんだった。

「ハイ、ゼア」

「どこまでいきたい」

「ホノルル」

「OK。乗りな」

あたしは、錆^{さび}かけたドア・ノブを引く。助手席に乗りこむ。

「俺^{おれ}あ、ハンクだ」

「未^み記子よ。みんなミッキーって呼んでるけど」

ミッキーなんてニック・ネームは好きじゃない。まるで男の子だ。ハワイアン・ネームのレイラニで呼ばれたかった。

けど、もう10年ぐらい、ミッキーで通ってた。

あたしのフル・ネームは、ひどく長い。読み上げてたら、終わるまでにホノルルに着いちゃうだろう。

おっさんは、ひどく色白で、ひどく太ってた。まるで、ゆで玉子だ。

あたしは、ゴムぞうりを脱ぐ。シートにもたれる。素足を、ダッシュ・ボードにのせた。

褐色の脚を、おっさんはチラッと見た。

ギアを入れながら、

「あそこから出てきたのか」

アゴで、バック・ミラーをさした。

パイナップル畑の逆サイド。東側の丘のまん中。ぽつんと、赤い屋根の建て物が見える。観光客が見たら、のどかなハイ・スクールかなんかに見えるだろう。

けど、それはあたしが出てきたばかりの感化院^{ガールズ・ホーム}だった。

答えるかわりに、カー・ラジオのスイッチを足の指で押した。

EMMYLOU HARRISの唄^{うた}が、雑音まじりに流れる。カントリー・バラードだ。バック・ミラーの中で、赤い屋根がどんどん小さくなる。

「何してブチこまれた」

「もう、忘れたわ」

「そんなに長く入ってたのか」

「あそこで生まれたような気がするわ」

おっさんは、腹をゆすらせて笑った。

「年齢^{とと}はいくつだ」

「15よ」

これは、本当だ。

「チョプスイか」

「まあね」

チョプスイってのは、チャイニーズ・フーズのひとつ。ゴチャゴチャのいため料理だ。

いろんな国の血が混じってることを、チョプスイ・ガールってい

う。ハワイのスラングだ。

「いくつ混じってる」

あたしは、指を折りながら、

「ジャパニーズ。ハワイアン。アメリカン。スパニッシュ……それに」

「それに？」

「^{ポーク}豚肉」

おっさんはまた、腹をブルブルとゆすって笑った。

「週に1回、あそこを通るんだが、お前さんみたいな〈出たて〉をよくひろうよ」

「そう」

おっさんは、勝手にしゃべりつづける。

「その、^{しり}尻にさしてる棒はなんだい」

ヒップ・ポケットにさしたドラムスのスティックを、アゴでさした。

まったく、おせっかいなおっさんだ。いやんなってきた。けど、つぎのクルマをひろうのも、めんどうだ。

「これは^{チョップ・スティック}〈おはし〉よ。そんなことより、^{たばこ}煙草持っていない」

おっさんは、胸のポケットからKOOLを出した。

あたしは、1本くわえる。^{いろう}硫黄マッチを、ダッシュ・ボードですった。硫黄の臭いが飛んでから、煙草に火をつける。

1年ぶりだ。さすがに、ちょっと、クラッとする。

フーッと煙を吐く。煙は、クルマの窓に吸いこまれて流れ出ていく。

曲が、DOLLY PARTONに変わった。



「あれ!? どうしたの」

クルマが急にとまった。ついウトウトしてたあたしは、目を開けた。

トラックは、広大なパイナップル畑の小道に入ってた。何もないところだ。

おっさんは、もうクルマをおりてる。

パンクでもしたのか。あたしも、クルマのドアを開けておりてみた。

おっさんは、荷台にもたれて煙草をふかしてる。

「どうしたの」

「なあ。ものは相談だが」

おっさんは、あたしのバストあたりをジロジロ見て、

「20ドルで、どうだい」

「20ドルって？」

「とほけなくてもいいんだ」

おっさんは、ニッと笑った。ヤニでまっ黄色になった歯をむき出す。まるでトウモロコシだ。

「どうせ売春でブチこまれたんだろう。ホノルルに帰るまでの間にひと稼ぎつてのも、悪くないと思わないか」

「売春!?」

冗談じゃない。

^{だれ}誰が、そんなセコいことやるもんか。こう見えたって、あたしは保証書つきのヴァージンだ。

「じゃ、倍の40ドルでどうだ。この前ひろったのは20だったが、お

前なら40ドル出してもいい」

おっさんは、あたしの体中をながめ回す。

確かにあの感化院^{かんかえん}には、売春でつかまった娘^こも多い。このおっさんは、いつもこんな風にしてきたんだろう。

ムカついてきた。

「くたばりな！ この白豚が」

あたしは、おっさんの足もとに、ツバを吐きかけた。

「そうかい」

おっさんはニタニタ微笑^{わら}ってる。いつの間にか、右手に拳銃^{けんじゅう}を握ってる。

あたしは、そのリヴォルヴァーを、チラッと見た。

案のじょう、サタデイ・ナイト・スペシャルってニック・ネームで通ってる安物だ。チンピラがドラッグ・ストアに押しこむには、ビタリのやつだ。

「どうせズベ公なら、ズベ公らしくしなって」

おっさんは、銃口を、あたしのバストに向けた。

「脱ぎな。すぐ終わるから」

すぐ終わるとは、ケンソソしたもんだ。

胸の中でため息をつく。正直、恐くはなかった。

感化院での袋叩^{ふくろうだて}きにくらべたら、どうってことはない。

ただ、暴発が心配だ。なんてったって安物の拳銃だ。

「いくらサタデイ・ナイト・スペシャルだって、この距離なら当たるわよね」

あたしは、いってやった。

「なんだと」

おっさんの目が、一瞬、びびった。

「撃ってみたら」

おっさんは、またニタッと微笑った。
「やけに強がるじゃないか。このイカれたロコが」

どうやら、そのひとことが、よけいだった。

〈ロコ〉ってのは、もともと〈ローカル〉からきてる。〈原地の〉とか、そんなニュアンスのハワイアン・イングリッシュだ。

あたしは、拳銃との距離を目で測る。

とどく……。

パイナップル畑を、気まぐれのように風が吹く。赤土が、さっと舞い上がった。

あたしは、チラッと左を見た。

おっさんも、つい、つられて見る。

瞬間、あたしはもう、ヒップ・ポケットのスティックを1本、引き抜いていた。

手首のスナップだけで、拳銃を握った右手首を打った。

ビシッと、にぶい音がした。

ハイハットを、思いきりひっぱたく。そのぐらいの力だった。

〈ロコが……〉

吐き捨てるようなそのひとことがなかったら、もう少し手かげんしたのに。

拳銃が、落ちた。

うめき声を上げて、おっさんはしゃがんだ。

2オンスたらずの軽いスティックだ。あの手ごたえなら、骨折はしてない。けど、ヒビぐらいは入ってるかもしれない。自業自得だ。

ころがった拳銃を、さっとひろう。

手首をおさえて、しゃがみこんだおっさんの顔に、銃口を向けた。
「やめてくれ！ 暴発したら、どうする！」

むくんだ顔から、血のけが引いていく。

ひどい話だ。さっきまで、ひとに向けてた拳銃じゃないか。

そうか。

なんせ、感化院を出てきたばかりの、イカれたロコ・ガールだ。パイナップル畑で撃ち殺されてたところで、警察も、そう真剣に調べないだろうなア。

あたしは、唇をかんだ。

つけっぱなしのカー・ラジオが、〈Tennessee Waltz〉をやっている。

「ぶち殺したいところだけど」

銃口を向けたまま、

「40ドル」

「40ドル？」

「そう。さっきいった40ドルで、なかったことにしてあげるわ。一発ぶちこむか、一発ぶちこまれるか。似たようなものよ」

銃口を、おっさんの腹に向けた。

「ためし射ちしてもいいのよ。そのお腹の脂肪だったら、防弾チョッキのかわりになるかもね。人間防弾チョッキか……。テレビに出られるかもしれないわ」

引き金に力を入れるふりをする。

「や、やめろ！」

おっさんは、尻^{シリ}をついて地面をあとずさりしていく。

「わかった。40ドルだな」

「カードはダメよ。キャッシュで40ドル。プラス州税^{タックス}4%」

おっさんは、左手をポケットに突っこんだ。ドル札を出す。

全部まとめて、ひったくる。

50ドル以上あった。10ドル札3枚と5ドル札2枚。ぴたり40ドルとる。残りを、シャツの胸ポケットに押しこんでやる。

地べたに^{すわ}坐りこんだおっさんにかまわず、トラックに飛び乗った。
エンジンは、かかりっぱなしだ。

ギアを入れる。窓から、
「ヒッチ・ハイクするなら、くれぐれも気をつけるのね」
ウインカー発。

Uターンして道路に戻る。

ルート99だった。

ホノルル方向に、ハンドルを切る。

カー・ラジオのボリュームを上げる。

ワヒアワの町が、ミリタリー・リザヴェーションが、窓の外を流れ過ぎていく。

クラッチをふむたびに、ヒップ・ポケットで、スティックがゴリゴリする。

おっさんの手首をひっぱたい感触が、よみがえる。

またやったのか……。教官の声が、どっかからきこえてくる。

まだ、1年しかたってないのに。



あれは、よく乾いた日だった。

午前中、一発、通り雨が走り過ぎただけだ。サラサラした風が、ヤシの葉を揺らしていた。

午後の授業を、あたしはさぼった。バイトがあるからだ。

^{シェイヴ・アイス}
かき氷屋だ。

氷、かき氷機、シロップなんかをつんだ屋台を、自転車で引っぱっていく。気の向いたところで店を開く。

売り上げの25%が、バイト料になる。

その午後。カピオラニ公園の前で、あたしはかき氷屋を開いてた。
夕方までに、70ドルぐらいの売り上げがあった。

あと10ドルで、80ドル。25%だから、20ドルのバイト料か。そんな計算をしていた。

4、5人の客がきた。

白人だ。みんな若い。体格もいい。夕方なのに、もう酔っぱらってるみたいだ。

「4つだ」

1人がいった。

「シロップは、なんにする」

「そうだなア。レインボーがいい」

レインボーってのは、文字どおり、何種類ものシロップをかけたやつだ。あたしは、4つ作った。

うけとった連中は、そのまま、かじりながら歩きだした。

「ちょっと」

「なんだよ」

「お金」

「金？」

「そうよ。お金、払ってよ」

4人の中で、いちばん酔っぱらった感じのやつが、あたしをにらんだ。あたしも、負けずににらみ返す。

ラコステのシャツを着たそいつは、ヘラヘラと笑う。仲間に、

「おい、金だとさ」

仲間も、ニヤニヤ笑ってる。

「この、ロコのカキが、金がほしいんだと」

「くれてやれよ、チャーリー。貧乏人をからかうのは、悪いくせだ」